## 表紙解説

### 種田山頭火句碑と工藤好美歌碑

平成二十六年十一月一日～二日、全国山頭火フォーラム佐伯大会が実施された。初日はシンポジュームが佐伯文化会館で行われ、二日目は山頭火が訪問したという浅海井暁嵐（ぎょうらん）の滝視察が行われた。会場には山頭火研究の方々八百余人が駆けつけた。

この大会を記念して佐伯文化会館横の地に「種田山頭火句碑と工藤好美歌碑」が建設された。句碑の横には次のような説明がなされている。

放浪の詩人山頭火は、親友工藤好美の故郷佐伯を生涯で二度訪れている。それは、いずれも好美の妹千代の菩提を弔う旅であった。

山頭火の佐伯訪問については、これまで謎とされてきたが、平成二十一年古川敬氏の著した「山頭火の恋」によって、その全貌が明らかになった。山頭火の人生は、東京での大正九年から好美・千代と過ごした時期が最も穏やかであると言われている。その小春日和の如き日々は、千代の死で終止符を打たれるが、山頭火と工藤好美との友情は、千代の死を経てより深いものになった。

それは山頭火の母の思い、好美の妹千代の想いを投影した絆とも言える。ここに山頭火の句と工藤好美の歌を刻み、その心情を後世に伝える。

母よ　うどんそなえて
わたくしも　いただきます　　山頭火

いま一度　この世に行きよと
同じ名を　おのが娘に
つけにけるかも　　好美

## 編集後記

二二六号をお届けします。

今回は戦後七十年を祈念して、戦争関連の記事を三点特集しました。過ぎゆく記憶も散り散りとなり、各地で当時のお話しをする方も減少しています。今一度当時の様子を人々に語り、平和の尊さを感受していただきたいと思います。残しておきたい思い、体験を原稿として、あるいはお手紙にて編集部にお寄せ下さい。宜しくお願いします。

あわせて会誌に対するご意見、ご要望等もお願い致します。

（編者部）